

満洲文字の文字表をめぐって(1)
—メレンドルフの文字表、翻字と転写—

吉池孝一 中村雅之

はじめに

中村：今回から満洲文字の“文字表”について議論をします。そこで、文字表とはなにかということについて簡単に触れておきましょう。見慣れない文字で書かれた言葉を学習したり研究したりする場合、文字の表をつくり、一旦ローマ字に書き換えます。理屈の上では、文字とローマ字が対応していれば、どんなローマ字をあててもいいのですが、ふつう発音を想起し易いローマ字をあてます。

吉池：見やすい文字の表にローマ字を対応させた“文字表”を作り、それを手元に置いて、学習・研究を進めるということが出発になるわけですから、文字表とローマ字の検討は先ずやらなければならない事ですね。

メレンドルフの文字表とローマ字

中村：満洲語の文語と、それを書く満洲文字の研究に大きな影響を与えた研究にメレンドルフ(1892)があります^①。次に古代文字資料館が管理する当該書の表紙画像を「図1. *A Manchu Grammar, with Analysed texts*」としてあげます。表紙をみると民国27年(1938)増印とあるから、これは1892年に上海で発行された原本ではなく、北京で発行された増刷本です。

現代の満洲語研究者のほとんどがメレンドルフ式というこの書で使用されたローマ字を採用しているので、まずはこの方式を確認しておきましょう。

吉池：別の影印本ではありますが、ウェブサイト古代文字資料館の「古書」(2008.6.6)に表紙と文字表の画像と竹越氏による簡にして要を得た紹介がなされていますね。引用すると次のとおりです。

「満洲語のローマ字翻字方式として一般的な「メレンドルフ式」で知られる書物。著者パウル・ゲオルク・フォン・メレンドルフ(Paul Georg von Möllendorff, 1847-1901)はドイツの外交官として中国と朝鮮半島に長く滞在した人物で、本書は彼が朝鮮政府の顧問を罷免された後に執筆された。内容はⅠ. Phonology, Ⅱ. Etymology, Ⅲ. Syntaxの3部からなり、翻字方式を記した表はⅠの冒頭部分に見られる。Ⅲは「一百条」(Tanggū Meyen)の1話分をテキストとした読解にあてられている。」

^① Möllendorff, Paul Georg von (1892) *A Manchu Grammar, with Analysed texts*, Shanghai.

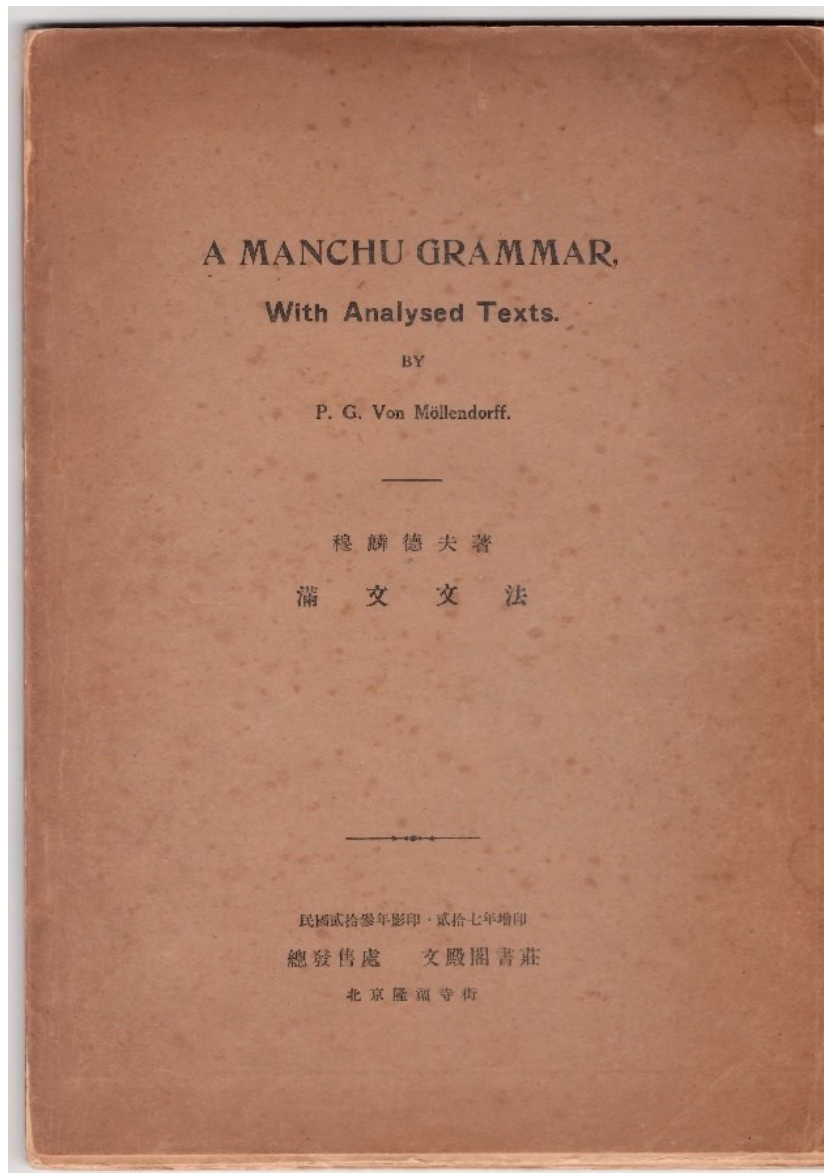


図1. *A Manchu Grammar, with Analysed texts*
古代文字資料館管理

中村:次にメレンドルフ(1892)北京本中の文字表の画像を「表1.メレンドルフの文字表(1)」として提示します。上述の古代文字資料館ウェブサイトで紹介された文字表と違いはないので、北京本の文字表により議論をすすめましょう。

吉池:やや大げさに言えばこれが満洲語・満洲文字の学習と研究の出発点ということですね。文字表の画像だけだと理解しにくいので、WindowsのMongolian Baitiに収める満洲文字のフォントを利用して書き直してみます。「表2.メレンドルフの文字表(2)」です。表中の一部の注記は省略しました。

表 1. メレンドルフの文字表(1)

THE ALPHABET.

	When alone.	In the beginning of a word.	In the middle of a word.	At the end of a word.
a	𐄀	𐄁	𐄂	𐄃 see n
e	𐄄	𐄅	𐄆	𐄇
when followed by n in the beginning of a word, a space is left to distinguish it from a: 𐄁 en 𐄁 a				
i	𐄈	𐄉	𐄊	𐄋
o	𐄌	𐄍	𐄎	𐄏 see b
u	𐄐	𐄑	𐄒	𐄓
ū	𐄔	𐄕	𐄖	𐄗
n	—	𐄙	𐄚	𐄛 like final a, but a vowel preceding shows that it must be n.
k	—	𐄜 when followed by a, o, ū 𐄝 " " " e, i, u	𐄞 𐄟	𐄠
g	—	𐄡 when followed by a, o, ū 𐄢 " " " e, i, u	𐄣 𐄤 𐄥 𐄦 𐄧 𐄨 𐄩 𐄪 𐄫 𐄬 𐄭 𐄮 𐄯 𐄰 𐄱 𐄲 𐄳 𐄴 𐄵 𐄶 𐄷 𐄸 𐄹 𐄺 𐄻 𐄼 𐄽 𐄾 𐄿	—
h	—	𐄿 when followed by a, o, ū 𐅀 " " " e, i, u	𐅁 𐅂 𐅃 𐅄 𐅅 𐅆 𐅇 𐅈 𐅉 𐅊 𐅋 𐅌 𐅍 𐅎 𐅏 𐅐 𐅑 𐅒 𐅓 𐅔 𐅕 𐅖 𐅗 𐅘 𐅙 𐅚 𐅛 𐅜 𐅝 𐅞 𐅟 𐅠 𐅡 𐅢 𐅣 𐅤 𐅥 𐅦 𐅧 𐅨 𐅩 𐅪 𐅫 𐅬 𐅭 𐅮 𐅯 𐅰 𐅱 𐅲 𐅳 𐅴 𐅵 𐅶 𐅷 𐅸 𐅹 𐅺 𐅻 𐅼 𐅽 𐅾 𐅿	—
b	—	𐆀	𐆁	𐆂 the downstroke is longer than that of o.
p	—	𐆃	𐆄	—
s	—	𐆅	𐆆	—
š	—	𐆇	𐆈	—
t	—	𐆉	𐆊	—
d	—	𐆋	𐆌	—
l	—	𐆍	𐆎	—
m	—	𐆏	𐆐	—
c	—	𐆑	𐆒	—
j	—	𐆓	𐆔	—
y	—	𐆕	𐆖	—
r	—	—	𐆗	—
f	—	𐆘	𐆙	—
w	—	𐆚	𐆛	—
<p>𐆘 foll. by a, 𐆙 foll. by e, 𐆚 is, 𐆛 te, 𐆜 after a vowel and before a consonant.</p> <p>𐆙 foll. by a, 𐆚 foll. by e, 𐆛 da 𐆜 de</p> <p>𐆘 foll. by a or e, 𐆙 foll. by other vowels, 𐆚 foll. by a or e</p> <p>𐆘 foll. by a or e, 𐆙 foll. by other vowels, 𐆚 foll. by a or e</p>				

For transcribing Chinese syllables:—

k' 𐄀, g' 𐄄, h' 𐄈, ts' 𐄙, ts 𐄛, dz 𐄜, 𐄝, 𐄞, sy (四) 𐄟, c'y (勒) 𐄠, jy (智) 𐄡

ng	—	—	𐄛 (a) 𐄜 (e)	𐄛
----	---	---	-------------	---

表 2. メレンドルフの文字表 (2)

	単独	語頭	語中	語末
a	ㄷ	ㅏ	ㅑ	ㅓ
e	ㅓ	ㅕ	ㅗ	ㅛ
*語頭 en は e と n の間にスペースによって、a の字形と区別される。				
i	ㅜ	ㅛ	ㅑ	ㅓ
o	ㅓ	ㅕ	ㅗ	ㅛ
u	ㅓ	ㅕ	ㅗ	ㅛ
ū	ㅓ	ㅕ	ㅗ	ㅛ
n	—	ㅕ	ㅗ	ㅓ ㅛ
k	—	ㅑ -a, o, ū ㅓ -e, i, u	ㅑ ㅓ	ㅓ
g	—	ㅑ -a, o, ū ㅓ -e, i, u	ㅑ ㅓ	—
h	—	ㅑ -a, o, ū ㅓ -e, i, u	ㅑ ㅓ	—
b	—	ㅑ	ㅑ	ㅓ
p	—	ㅑ	ㅑ	—
s	—	ㅑ	ㅑ	ㅓ
ś	—	ㅑ	ㅑ	—
t	—	ㅑ -a ㅑ -e	ㅑ ta ㅑ te a ㅑ -子音	ㅓ
d	—	ㅑ -a ㅑ -e	ㅑ da ㅑ de	—
l	—	ㅑ	ㅑ	ㅓ
m	—	ㅑ	ㅑ	ㅓ
c	—	ㅑ	ㅑ	—
j	—	ㅑ	ㅑ	—
y	—	ㅑ	ㅑ	—
r	—	—	ㅑ	ㅑ
f	—	ㅑ -a, e ㅑ -他の母音	ㅑ -a, e ㅑ -他の母音	—
w	—	ㅑ -a, e	ㅑ -a, e	—

漢語音表記用 【表 1 の下部を下記のように整理する】

・音節初頭の字形

k [ㄎ] , g [ㄍ] , h [ㄏ] , ts' [ㄐ] , dz [ㄑ] , ž [ㄒ]

・特殊な音節の表記

(「此」) ts [ㄘ] , 「四」 sy [ㄙ] , 「勅」 cy [ㄗ] , 「智」 jy [ㄗ]

ng

[ㄋ] (a) [ㄌ] (e) [ㄍ]

なお、表 2 の注記「-a, o, ū」などは母音 a, o, ū の上の字形であることを指します。「a- 満州文字 -子音」は母音 a の下、子音の上の字形であることを指します。

中村：母音 e の単独形の下にある注記「語頭 en は e と n の間にスペースによって、a の字形と区別される。」ですが、これは、n は通常左に点があるため、a と en(e+n) の字形は明瞭に区別されるけれども、encu や enduringge のように、n の次に c や d のような子音が続くばあい、n の点が書かれない。そのため、a と en の字形は類似するけれども、e と n の間がやや長くなるので字形の区別は保たれる、ということですね。

吉池：そのようですね。そうであるならば、n の中間字形には、点があるものと、点がないものの二種を出すべきですが、メレンドルフの文字表はそのようにはなっていません。n だけではなく、同様に省略されている文字情報がだいぶあります。

中村：最後にある漢語音を表記するための文字ですが、簡略に過ぎますね。なんらかのミスプリントもありそうです。最後の ng の語中形に (a) (e) とあるのは、それぞれ「-(a)ngg(a)-」「-(e)ngg(e)-」のことでしょうか。

吉池：特に問題となるのはピンインの zi, ci, si の音にかかわるローマ字表記ですから、まずはそこからはじめましょう。

中村：上の「此」は便宜的にここで補ったものです。「子」「此」「四」のような漢字の音は、現代北京語では「子」[tsɿ]、「此」[tsʰɿ]、「四」[sɿ]であり、母音は舌尖母音で日本語のズ、ツ、スのように聞こえます。この「子」「此」「四」は日本漢字音でシとされることから分かるように漢語の中古音（隋唐代音）では [i] 母音を持っていましたが、近世音（宋元代音）では、ほぼ現代北京語のような音になっており、漢語を表記するための満洲文字を新たに作った時点（清・太宗の天聰 6 年(1632)）では言うまでもなく [i] 母音

ではなく現代北京語のような音でした。満洲文字でこの漢語音をどのように表記するかは問題になったはずですが、メレンドルフの文字表とローマ字表記によると次のようになります。

(子 例字も満洲文字もローマ字表記もない)

(此)

ㄘ

 ts
四

ㄙ

 sy

それにしても何という不統一でしょう。ts'

ㄘ

 と、dz

ㄘ

 はそれぞれピンインの c と z で、母音が続く時の形です。しかし「此」にあたる音節は ts と表記していて、a や u などの母音が続く際の ts' と全く整合性が取れていません。さらに「四」に至っては sy という表記になり、同じ母音をもつ ts との整合性もありません。このような表記を意図的に作ったとは信じられないので、おそらくいくつものミスプリがあるのではないのでしょうか。

吉池: メレンドルフの文字表にはありませんが、「子」に相当する満洲文字はなぜか

ㄗ

 です。母音に相当する部分に、「此」や「四」を表記する満洲文字

ㄘ

 はありません。新たに満洲文字を作った人たち(満洲人)は漢語音の「子」[tsɿ]の[ɿ]と、「此」「四」の[ɿ]とは異なった音に聞こえたため、異なった表記としたのでしょう。

ㄗ

の下部が、何らかの母音を示すのか、それとも母音ではなく、子音

ㄘ

 の単独形にすぎないのか、検討が必要ですが、それは後日にするとして、メレンドルフの文字表の立場としては語頭の子音として

ㄘ

 を出しさえすればよかったということです。「子」などの表記には dz の単独形を当てると想定していたとすれば、わざわざ文字表に挙げる必要はないと考えたのかも知れません。

中村:

ㄐ

 と

ㄑ

 のローマ字表記にも問題があります。ci

ㄐ

 の右に・を付した

ㄐ

 で「勅」を表記し、そのローマ字表記は「」を付して cy とするわけですが、ji

ㄑ

 の右に・を付した

ㄑ

 で「智」を表記する場合のローマ字表記は「」を付さない jy とします。これもローマ字表記に整合性がありません。cy の方も cy とすべきでしょう。これらはミスプリントではないかもしれませんが、もしも整合性に欠けるこれらの表記を採用した理由を明示できないとしたならば、やはり訂正をすべきでしょう。

吉池: 同感です。メレンドルフのローマ字表記の影響を受けた後代の表記をみると、このような整合性に欠ける部分を引き継いでいます。漢語音表記用の部分について、仮に次のように修正すれば、かなりスッキリします。

漢語音表記用 【表2の修正】

・音節初頭の字形

k [ᠠ] , g [ᠡ] , h [ᠢ] , ts [ᠴ] , dz [ᠵ] , ž [ᠶ]

・特殊な音節の表記

「此」 tsy [ᠴᠢ] , 「四」 sy [ᠰᠢ] , 「勅」 cy [ᠴᠢ] , 「智」 jy [ᠵᠢ]

中村：ng の注記(a)と(e)はどうでしょうか。

吉池：ng を他の文字から離して配置するのは、この子音は語頭に位置することがなく、母音が後置することもない特殊な子音であることによるのでしょう。語中の二つの字形のうち、(a)と注記が付された字形はngに子音g [ᠭ] が後続する形で、(e)と注記が付された字形はngに子音g [ᠬ] が後続する形と理解してフォントを当てました。注記の(a)と(e)の意味は明瞭ではありませんが、あるいは(a)のaは男性母音を、(e)のeは女性母音を代表させたもので、(a)が注記された文字は男性語の子音g [ᠭ] が後続することを指し、(e)が注記された文字は女性語の子音g [ᠬ] が後続することを指しているのかもしれませんが。

いずれにしても、この文字表の構造と、文字のローマ字化は後世に大きな影響を与えたようで、とくにローマ字はメレンドルフ式として、多くの研究者が利用しているということですので、ローマ字表記の特徴については検討する必要がありそうですね。

翻字と転写

中村：文字表を作る場合、文字の仕組みや、発音の仕組みを理解しやすいように縦横に文字配置するのですが、その配置の仕方にも工夫が必要です。そしてローマ字をあてるわけですが、ローマ字をあてる方法には概略として二種類あります。一つ目は、字形の異なりを正確に反映させたもので、これを「翻字」とよびます。二つ目は、その文字で書かれた言葉の音を（正確にいうと音韻を）反映させたもので、「転写」とよびます。転写は同じ文字で書かれていても、言葉として音が異なればローマ字も異なったものをあてます。文字に無い情報も追加するというものです。逆に言葉の音と関係の薄い文字情報を捨象する場合もあります。

吉池：ローマ字が翻字に傾くか、転写に傾くかは、文字と言葉の関係によるのでしょうね。現在内蒙古で使用されているモンゴル文字は長い歴史を持っているわけですが、モンゴル語の子音や母音の区別を十分に表記することができません。モンゴル語のaとe、oとu、tとd、kとg、などの区別を文字で書き分けることができないので、学習・研究におけるローマ字化は転写に傾きます。もちろん、aとeをA、oとuをO、tとdをT、kとgをKなどとして区別せずに翻字することは可能ですが研究用の補助に止まります。やや話が飛びますが、同じモンゴル語を、14世紀の元代ではパスパ文字で表記しました。パスパ文字はモンゴル文字よりも精密に音の区別をしたので、学習・研究におけるローマ字化は翻字に傾きます。

中村：満洲文字の場合はどうかということですね。

吉池：満洲文字には、モンゴル文字をほぼそのまま利用した 16 世紀末の「無圏点満洲文字」と、無圏点満洲文字に圏点（[◦]や、などの記号）を付して満洲語音の区別に対応するよう改良した 17 世紀初めの「有圏点満洲文字」があります^②。無圏点満洲文字は満洲語の表記に必要な a と e、o と u、t と d、k と g、などの区別がないので、単純な翻字では研究上の障害が多く、音韻を考慮した転写に傾かざるを得ません。もともと、a と e を A、o と u を O、t と d を T、k と g を K などとして区別せずに翻字することも行われますが、それは研究上必要な場合に限られます。有圏点満洲文字は、モンゴル語の表記にとってのパスパ文字のようなもので、音を区別する字形は用意されているので、こちらは翻字のための条件がそろっています。

中村：われわれが議論する文字表とローマ字は、後者の有圏点満洲文字（これから単に満洲文字ともよぶ）のほうですが、ローマ字は翻字とよんだほうが適切なのか、それとも転写と呼んだほうが適切なのか、実際はどうなっているかということですね。

吉池：k, g, h をみると、ᡤ等とᡤ等の二種類の満洲文字があり、それぞれの文字の後ろに付く母音の異なりによって前の子音字が異なっています。母音の違いに応じて子音字形が異なっているわけですが、これによると、子音字形の異なりは余計な区別で、実際の音は k, g, h の一つで良いとメレンドルフは考えていたように見えます。もしそうであるならば、このローマ字は転写ということになりますが、どうでしょうかね。

ローマ字表記	満洲文字
k	ᡤ a, o, u の上
g	ᡤ a, o, u の上
h	ᡤ a, o, u の上

^② 1599 年（明・神宗の萬歴 27 年）、後に清の太祖となるヌルハチ（努爾哈赤）は、大臣のエルデニ（額爾德尼）とガガイ（喝蓋）に命じて、モンゴル語を表記するモンゴル文字を利用して満洲語を表記させた。この時期の文字が無圏点満洲文字とされるものである。1632 年（清・太宗の天聰 6 年）に、太宗のホンタイジ（皇太極）の文字改革の命をうけ、ダハイ（達海）は無圏点満洲文字に丸（圏）や点を加えて発音の違いを明瞭にするるとともに漢語からの借用語音を表記するために新たな文字を作った。

以上は金啓彦(1981)『満族的歴史與生活 —三家子屯調査報告』45-56 頁、哈爾濱：黒龍江人民出版社。池上二郎(1994)「満洲語文語の正書法の沿革 —特に o, u, u について—」『東方学』88、100-110 頁を参照。

k	<input type="text" value="ㄅ"/>	e, i, u の上
g	<input type="text" value="ㄆ"/>	e, i, u の上
h	<input type="text" value="ㄇ"/>	e, i, u の上

中村：メレンドルフの文字表の下の欄外に、中国語用の文字（k' g' h）があります。メレンドルフ(1892)には明示されていませんが、これはたしか、後ろに母音の a, o が続く場合の外国語用の字形ですね。そうすると、上に挙げた a, o, u の上の 等と a, o の上の 等は子音字の違いだけで対立をしていることになります。これをどのように考えたらよいか、やや複雑ですね。

吉池：手もとに、漢語を表記した満洲文字を並べた資料があります。『清漢對音字式』（巻頭に乾隆 37 年（1772）の上諭文があり表紙には宣統元年新鑄とある）というものです。これは便利な書物で、漢語音を満洲文字でどのように表記したかが、すぐにわかります。メレンドルフ(1892)の満洲語の表記と、『清漢對音字式』からわかる漢語の表記を合わせ見ると、次のようになります。

ローマ字表記 満洲文字

■ 満洲語の表記

k	<input type="text" value="ㄅ"/>	a, o, u の上
g	<input type="text" value="ㄆ"/>	a, o, u の上
h	<input type="text" value="ㄇ"/>	a, o, u の上

■ 漢語の表記

k'	<input type="text" value="ㄅ'"/>	a, o の上
g'	<input type="text" value="ㄆ'"/>	a, o の上
h'	<input type="text" value="ㄇ'"/>	a, o の上

■ 満洲語の表記

k	<input type="text" value="ㄅ"/>	e, i, u の上
g	<input type="text" value="ㄆ"/>	e, i, u の上
h	<input type="text" value="ㄇ"/>	e, i, u の上

■ 漢語の表記

k	<input type="text" value="ㄅ"/>	e, i, u の上
g	<input type="text" value="ㄆ"/>	e, i, u の上
h	<input type="text" value="ㄇ"/>	e, i, u の上

中村：これによると、母音 a, o の上の満洲語を表記する文字と漢語を表記する文字は異なる

ものが使われ、母音 e, i, u の上の満洲語を表記する文字と漢語を表記する文字には同じものを使われています。この違いをどのように理解するか。

a, o の上の漢語を表記する ?k 等は、有圈点満洲文字を作る時に新たに作った文字です。新たに文字を作ったり、旧文字の使い方を変更したりするばあい、そこに文字を使用する人の発音の習慣が反映されるということはしばしば起こります。そのような点からみると、a, o の前の満洲語子音と漢語子音は異なっているが、e, i, u の前の満洲語子音と漢語子音は同じものであると認識しており、a, o の前の満洲語子音と漢語子音の違いを明示するために新たに ?k 等の文字を作ったということでしょう。このようなことは、すぐにはわかることですから、メレンドルフは承知の上でこの文字表を作ったと推察します。

? 等と、? 等 ? 等の発音の違いは、? 等が喉の奥よりで発音する [q] 等で、? 等 ? 等は [k] よりも前寄りの [k] 等でしょう。

吉池：これまでの議論をまとめると次のようになりますね。

	満洲人	メレンドルフのローマ字	厳密な翻字
?	[q] a, o, u の上	k	k
?	[k] e, i, u の上	k	k'
?	[k] a, o の上	k	k''

厳密な翻字として、? ? ? を k k' k'' とすることができます。しかしメレンドルフはそのようにはせず k k k' とした。その理由は ? と ? を同音と見なしたためではない。もし同音と見なしたのなら外国語用の ? も k で表記したはずです。メレンドルフが ? と ? を同一のローマ字 k で表記したのは、満洲語音が同一であると判断したためではなく、ましてや音韻論的な解釈（[q] と [k] の違いは、母音の違いによるものであり、一つの音（音素）/k/である）などではなく、字形による違いを反映させる翻字を目指したためでしょう。? と ? を同一のローマ字 k で表記しても、後続する母音の違いによって、子音文字の違いは指示することができます。しかし、k k k'' のような表記は煩雑に過ぎると考えたにちがいません。煩雑さを避けて k k k' と表記したということでしょう。

中村：別の言い方をすれば、メレンドルフ式のローマ字は、ローマ字翻字であるが、煩雑さを回避する、すなわち“実用”を重視する面を加味したため、一見するとローマ字転写のように見えるということですね。つまり、メレンドルフ式のローマ字は、音韻を考慮した転写ではなく、実用性を加味したローマ字翻字であると。

吉池：メレンドルフ(1892)の文字表をみると、t にも後続する母音の違いにより字形が二種あります。d も同様です。f にも後続する母音の違いにより字形が二種あります。しかしメ

レンドルフ式のローマ字は区別せずに t, d, f となっています。厳密な翻字としては t, t̄, d, d̄ ; f, f̄ のように区別してもよかったです。しかし、そのようにはしなかった。それは t, d, f で表記しても、後続する母音の違いによって、子音文字の違いは指示することができるためです。t, d, f の音がそれぞれ一種であったということとは直接の関係はないでしょう。

中村：それでは初回はこれまでとして、次回はメレンドルフの影響を受けた後代の文字表を検討しましょう。